

## 私の値打ち

青 山 謙二郎

奨励者紹介〔あおやま・けんじろう〕

同志社大学心理学部教授

〔研究テーマ〕学習心理学、行動分析学、食行動の心理学

「そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」

（マタイによる福音書 25 章 34—40 節）

ご紹介頂きました青山です。同志社大学の卒業生で、大学時代は学生聖歌隊というサークルに入っていましたので、チャペル・アワーにずっと出て讃美歌を歌っていました。当時はまだ洗礼を受けてなかったので、時効だと思って告白しますが、実はよく寝ていました。さらに告白しますが、「大学の先生がチャペル・アワーに来ると話がつまらないことが多いな」とまで思っていました。当時の自分を叱りつけたい思いで一杯です。「ここで話す方の身になってみる!」と言いたいです。ただ、中にはおもしろい話もあって、それはキリスト教精神と関係する映画とか小説とかの紹介をしてくれる時が多かったです。ですから、僕はチャペル・アワーでは受け売りの話をすると決めているのですが、今日の話はテレビからの受け売りです。

6月には今出川のチャペル・アワーで話しました。今日は聞く人が違うから同じ話でいいだろうと思っています。6月23日でした。何の日か知っていますか。沖縄慰霊の日です。沖縄県が制定している記念日で、沖縄戦等の戦没者を追悼する日です。だから沖縄のテレビの話の受け売りをしました。今日もその話になります。

### 「イエスと歩む沖縄」より第1のイエスとの出会い

NHK教育テレビジョンで「こころの時代～宗教・人生～『イエスと歩む沖縄』」という番組が2013年

12月22日に放送されました。好評だったようで再放送もされています。<sup>たいら おさむ</sup>平良 修 牧師という方についての番組です。1931年生まれ、宮古島の出身で、放送当時82歳。牧師生活57年、プロテスタントで、同志社教会と同じく日本基督教団です。

平良牧師は中学生の時、沖縄戦前に1944年に台湾に疎開します。戦後、宮古島に戻られました。高校生の時に<sup>くに なか かんいち</sup>国仲寛一牧師と出会います。これが「第1のイエスとの出会い」でした。国仲牧師は、宮古島になかったキリスト教の教会をつくりました。また、具体的な行動を通して若者にイエスの道を伝えました。礼拝後、トラックに若者を乗せ、ともに宮古島のハンセン病施設を訪問しました。島の片隅にあり、有刺鉄線で隔離されていました。患者は子どもを生むことを禁じられるような差別がある時代でした。国仲牧師は、小さい者、弱い者の傍らにいたイエスの教えを患者に伝え励ましたそうです。そして、若者にも「患者に積極的に会い、交遊すること」をすすめたそうです。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」という言葉（ヨハネによる福音書 15 章 16 節）があります。平良牧師は言われます。クリスチャンになって人間観が変わった。自分の理解が変わった。「キリストが私のために死んでくれたほど値高い人間」。私の尊厳は私の如何によらない。私が墮落しても尊厳は消えない。神によって打ち込まれている尊厳。自分だけでなく、あの人にもこの人にも例外なく同じだけの尊厳を与えてくださっているという人間観。だったら人間を粗末にできない。単なる人間ではない。一人ひとりがキリストが隠されている人間なのだ、という人間観を持つようになったそうです。

平良牧師はその後、日本の本土に留学されます。まだビザが必要な時代でした。牧師になるために東京神学大学に入学します。学費の多くは米軍の教会が出してくれました。7年後に沖縄に戻ります。コザ市（今の沖縄市）にある<sup>じょうち</sup>上地教会に赴任します。米軍の嘉手納基地のゲート近くの教会です。米軍の教会に感謝しつつ始まった牧師生活でした。お礼に米軍の教会に行きました。すごく喜んでもらえました。自分たちの善意で学んだ若者が立派に牧師になって沖縄に戻ってきたのです。基地の中はきらびやかで、基地の外の沖縄に比べたら御殿のようでした。みなクリスチャンで仲間です。一般の沖縄の人が入れないところにクリスチャンだから、教会員だから入れてもらったのです。「米軍によって足を踏みつけられている一般の住民から離れて、足を踏みつける側の米軍に身をすり寄せる」ようであったと、平良牧師は後に回顧されています。

### 「イエスと歩む沖縄」より第2のイエスとの出会い

しかし6年後、基地の前の教会で見失っていたものをつきつけられることになります。1965年にアメリカ・テネシー州のジョージ・ピーボディ教育大学に平良牧師は留学されました。沖縄に開学した沖縄キリスト教学院短期大学の次期学長に推挙されていて、教育学を修めるためです。ある日、白人の友だちに誘われ教会で開かれた黒人の集まりに参加し、衝撃を受けます。人種差別撤廃の公民権運動が盛んなときでした。運動の最中で犠牲になった仲間を偶々黒人がゴスペルを歌う姿を目の当たりにします。その歌声が沖縄を強く呼び起こしました。そこで歌われていた歌である「We Shall Overcome」は、今日の讃美歌です（『讃美歌 21』471番「勝利をのぞみ」）。また、「Nobody knows the trouble I've seen」<sup>1</sup>という歌も歌われていました。この歌は僕も学生聖歌隊の時によく歌いました。「自分たちの悲し

みは誰も知らない。知っているのはイエス様だけだ。イエス様、なんとかしてくれ」と訴える激しい歌です。平良牧師は言葉にならないショックを受けました。同じように激しい歌が沖縄でも歌われていた。それが届いていなかった。知ってはいたけれど、自分の歌にはなっていなかった。これが2回目のイエス・キリストとの出会いでした。本日の聖書箇所である、マタイによる福音書の25章34—40節が、番組でも紹介されていました。

「『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』」

つまり、苦しんでいる人にしたことは私が神様にしたこと。しないことは、神を突き放すこと。小さなキリストを大事にせずに、なぜキリストを大事にするとと言えるのか。黒人霊歌を歌う人も、沖縄の民衆も小さなキリストなのです。

#### 「イエスと歩む沖縄」より高等弁務官就任式での祈り

平良牧師はアメリカの経験で、沖縄で支配されている人の側に主イエス・キリストは立ちたもうと確信されます。そして沖縄に戻られます。

1966年に沖縄に新しい高等弁務官が就任します。アメリカの、沖縄での最高権力者です。米軍統治下の沖縄で強大な権力を有し、帝王と恐れられていました。平良牧師はその就任式で祝福の祈りを捧げるよう求められました。そこでの祈りは内外で大きな反響をよびました。「最後の高等弁務官になりますように」と祈ったのです。つまりアメリカ支配が終わりますように、という祈りです。

「<sup>2</sup>神よ、沖縄にはあなたのひとり子イエス・キリストが生命を賭けて愛しておられる百万の市民がおります。高等弁務官をしてこれら市民の人権の尊厳の前に深く頭を垂れさせてください。そのようなあり方において、主なるあなたへの服従をなさしめてください。天地のすべての権威を持ちたもう神の子イエス・キリストは、その権威を、人々の足を洗う<sup>しもべ</sup>僕<sup>しもべ</sup>の形においてしか用いられませんでした。沖縄の最高権者、高等弁務官にもそのような権威のありかたをお示しください。」

祈りは沖縄の人々に大きな共感を呼びました。一方で、牧師が政治と宗教の二股をかけたアメリカの新聞などから批判も呼びました。

その6年後の1972年、沖縄は日本に復帰しました。平良牧師は今も存続する基地に牧師の立場から

反対されています。

### なぜ人一人は大切なのか

「諸君よ人一人は切なり、一人は切なり」

よく同志社で語られる新島のことはです。僕の研究室は京田辺会堂言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂の横の建物なのですが、最近ではそのエレベーターにも貼ってあります。エレベーターが必要な人に譲ってね、ということをお知らせの意図です。新島の不在中に退学処分に処せられた7人の学生たちのことを覚えてこの言葉を語ったそうです。なぜ新島はこの言葉を語ったのでしょうか。キリスト教文化センターの越川弘英先生もある文書に書いておられましたが、おそらくこのとき新島の心に浮かんでいたのは、群れを離れ去った1匹の羊と、その羊を探し求める羊飼いのたとえ話だったのではないのでしょうか。

では、なぜ「人一人は大切」なのでしょう。なぜ他の99匹の羊をおいてまで1匹の羊を探し求めるのでしょうか。私たち一人ひとりが、キリストが私のために死んでくれたほど値高い人間だからではないかと思えます。同じだけの尊厳を例外なく与えてくださっているのです。ですから、お互いに、個人として尊重されるのです。これが「個人主義」だと僕は思っています。「個人主義」は同志社の大事な精神だと思っています。誤解されやすいのですが「利己主義」とは全く異なります。お互いに個人として尊重しあうのです。ですから自分の利益だけを求める利己主義とは正反対です。一人ひとりの個人に、他人に侵すことのできない人権がある。これが同志社の大事な精神だと思っています。

### 〔注〕

1 とともに「アフロ・アメリカン・スピリチュアル」 作詞作曲者不詳

2 平良修 『私は沖縄の牧師である＝沖縄恨之碑の会 講演録＝』 沖縄恨之碑の会 2015年

2021年11月24日 京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー「創立記念礼拝奨励」記録